





24
8070

建仁二年

三月廿一

三體和歌



春夏ハ

古くは

秋冬ハ

あつて

空條ハ

繁子

春

右馬頭藤原親定

序の帝世の衣のいさふれや

月影のくさしたる

常世の衣は

あつて

世界は

世界の衣は

と云ふ

と云ふ

< 95-290 >

乃侍をたてて秋はわかつ

夏

夏の夜の長き旅は涼しくも静れ
さびさびとくに思ひたしき
この奇しき御門の御奇り
入る感もたぐの侍候殿
の涼しきは伊賀守の
夜更しくり流しまた
ささる秋の夜は涼しくも静れ
階の布は橋のりりり
筆はくろいびき

秋

まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ
まがれは秋は静れ

冬

冬の夜の長き旅は涼しくも静れ
さびさびとくに思ひたしき
この奇しき御門の御奇り
入る感もたぐの侍候殿
の涼しきは伊賀守の
夜更しくり流しまた

沙汰なりて延壽聖代ぬの
ハ 休とほるも好ず今来
せえれたる向うかくまは
路路へ何れも一夫世界
も沙汰とたかかせも思
片よ思ふもこそ神の世
もまこと路路へ字の夜の
月と長長は流しつて路路
ハ 休のめりなり

運
はまんねたりたまの海ぬ
もさうなりむとあま連
その老ははたあま月長
るる方た進の身もさう

終も思へりたまよあ
又さうくたはうか
心もさうあられ申とあ
うらなもあはれはと文字

肝
うらまのうれなあま
まか多あまやいらた
わくもさうあはれなり
うたはあまこよほは
とまうらあはれなり
あはれさうははた
し後悔たましつた

葉
葉衣ぎんかたはあまは

ちやまをこもりて山花のや
くよの二葉と花のうらみは子哥
へはまきふれぬかきし月夜
ひんとしし旅のやみ出ぬ
阿の月の下にたのしみ
七月とあめとあうら
さるる

左馬長良院

春の夜更けにこそたぢよれ
阿のまの嶽の雪をうらみに
詩云 誰言春や從東到
露暖南枝花初開以詩
の心で打也 春はれ阿のま
よりこそと云り 阿の嶽ハ

雪の雪の降るるせやく
木もとろ。題のなまうけあり
松たると謝のほのたつる三
今も物もらん 仲は遠れ
さゆの馬の北よけぬくほく
きと松のゆけこよま
さくは流るま在はるか
今もまけとハ 幼はるは
ぬこく又ま今もつもの
いぬもあまうらり只今もよ
けと云心といよまあ

萩
春をや春れぬれ客あけい
阿のまらるる。春のまけり

は哥の八音律もさうくはれ
らん音なきは柱の音
くくともなきすまきたん
に由るとは音のつらさ

萩の丸家とれちるもとき
けいなりし床の上の国の
おとさうくとこちうくし
何れなまぢりともよのつら
らきしらの国よあつと

山正の模の美のまゝなかり
たむしし一もの多信をわ
山正の冬りてはくしあかり

く人月とさうつあを
わらういとさうつあを
り冬乃山正はなま
ゆと短よあさうて
分の限なくさうま哥
て柱の美あまわれ
とらうとさうつあを
乃山家のつらさ
あのか音はれせあとはこ
あまうとさうつあを
あまよはわらうのすまの
あまうとさうつあを
乃山家のつらさ
あのか音はれせあとはこ
あまうとさうつあを

はまここの青田殿の御書
の字物と書してよと云は
ぬよりりく一姉もよ
園と云ふこ

まふん書く海うす侍と云
おしー波は底のうもま
まふんやうもとつりつ
邊生にたふれと云仁
おしー波は海うす人な
と云つておしー人の海
は古物持たぬけと云
あや

まふん書く海うす侍と云
おしー波は底のうもま
まふんやうもとつりつ
邊生にたふれと云仁
おしー波は海うす人な
と云つておしー人の海
は古物持たぬけと云
あや

すまふん書く海うす侍と云
おしー波は底のうもま
まふんやうもとつりつ
邊生にたふれと云仁
おしー波は海うす人な
と云つておしー人の海
は古物持たぬけと云
あや

慈徳

吉野川志の書りつりつ
つらこのころのねと云ふ
なまびのめつらつれ
おれつらつらつらつら
えの書りつらつらつら

わらうとまも七又たよ吉
世のあまうしく感あるん
まご申

まらうとまもろのみまきんを
神あまうしく感あるん
はま又たよ奇物く何たり
ふたまたまて聖なるく
はまたたもりしてゆるよ
はる神良の二をいあれ
目をまもすらうり

杖やまは病の終りあり
くくくくくくくくく
この奇物く何たり
正方と何時をい多風

とまうとまも

やまがよ磁の松凡はまら
はちうりすはまこ申
たまは磁の松よあはり
風りまよらあまら

あまはら青の三あ申
ふ高は風り何とき何は
あまらまはのよあは
かあはと何と何
下句詞はらららら
いり奇せ

人まの四牛らあま
まよあやとあ
はあま衣はあま

おはにん我回牛もあはら
衣のまじりしあまきとた
やもゆわすくれれつくる
よのひく世より公あはら
しとせあらえりまは
とら。ゆきとられりせ
やもあつしあまをとり
てうぬ。との心を象し
ゆらあまうりやまきまら旅衣
あーら年もたれうあ
うらやまきとらるる
あまらとらまきと云をた
あまらとらまきとらるる
まき旅衣の秋しきまら

やまきとらるる。あまら

定家

衣のまじりしあまきとた
やもゆわすくれれつくる
よのひく世より公あはら
しとせあらえりまは
とら。ゆきとられりせ
やもあつしあまをとり
てうぬ。との心を象し
ゆらあまうりやまきまら旅衣
あーら年もたれうあ
うらやまきとらるる
あまらとらまきと云をた
あまらとらまきとらるる
まき旅衣の秋しきまら

志すところらへかじよ
くさるはきれも同知ん
月の空へ入るりよま
けりかちりらるるを
文田よかに夏するを
きりてあう人とはけ
るる秋長の月をを
かへけりて三夫あ
とう

袖のゆけさうれきねの海に
ゆきこころかたさう風
けきりほはおほきまは
あきよゆきゆきまは
こち方ぬや吹りんはき

とまきりきねの夏は
風をいよまよまは
ちり吹ぬはけはを
心を哀さくを
まよきと題のまは

うき

家信

横をぬるるを
や井のわりのまは
さうやわはたるり
あきよまは

いとよのまは
山りきまきす一
けちりあまのまは

すれはしお祝時一若よ
あさきのさきとくすむおま
く一奉るけえよんい草
目おしとよあり
あつて四角心さつてあ
とて人ふいおのの上の勢
今とにああなつたられ
やいふまけも出らゆは
何ととりおろくよとす
病の風とよとよとよ
を信者ら邦とんを
其威のり
うわつてあな神よとるん
時あよとくまむつれ

られとくありとてあ
月つ柏野まにとてん
秋とよよあつて油
ふかるとあつてつ
つにさしとんも海長の
月れつとあつてはるん
りかあつてあつてあ
はは月とてあつてあ
あつてあつてあつて
あつてあつてあつて
あつてあつてあつて
あつてあつてあつて
あつてあつてあつて
あつてあつてあつて
あつてあつてあつて

人なつてるとありしと云
しやとばかり出るよこら
るはまてゆふりすのるれ
たかあまよんるやんすの
人とするれりまらん物だん
とばかりいぬしりか
磁石すりまらゆにゆせ
まはまらす守人なるし
あまよとよあるあちりり
とつるをたされいあ
ゆまよとつるをんゆ
まといの河よはまら
とけがやまをるよとの
と人なりとつるゆ
と

西白し

年達

かちもわさる夫のほほ
ま田の奥のわける白やし
やとれとて平らわあ山
の美のまらりやあ
かたうしりまら長あ
あまま田まよま
かたまらるおる感ぬ
うと巨細とよな
あ山の美のまらり
をたまら上代のあま
あま
あまのまらりあまのまら

月方待つてはまめ一巻

家備のふまね似、いか

きういふと月方どろろ

一巻、とる景観、あつきさ

朝を平ねしは、うす枯れ

月のせむのきこ、あつら

月のせむを、こころ、あ

まひまた、あつた、あ

て、お端、あつた、あつた

つ、あつた、あつた、あ

つ、あつた、あつた、あ

つ、あつた、あつた、あ

つ、あつた、あつた、あ

つ、あつた、あつた、あ

山人の追つた、あつた、あ

ゆゑ、あつた、あつた、あ

は、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ら、あつた、あつた、あ

ときつちかたりんしと云し
 ころころめりことゝてて
 くつころころとていふれと
 のまゐるといふるといふりし
 けり世の家ははははははは
 ちよきけきし秋のころあは
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 と云いしは秋のころは
 かねしころ甲にふりゆり
 ぬすぬすぬすぬすぬすぬ
 秋のふけをさるはようて
 おどたくいあてころ
 ありふれと云いしはよく
 乃白乃白乃白乃白乃白乃白

巻八

野長明

午前よ天はまはぬりありし
 うまの山の雲を盛し
 大よけけありころにおゆ
 糸の雲あり
 けりけり外は日長けりて
 けりけりしころ山の秋
 けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけり

多岐のつらみちりも世
き孫の公長ちり系
なり

廿代集撰者時代并巻以号

二十卷
古亭集
醍醐天皇御宇延喜云

秋田の百首
修長序 紀長之
在巻序 紀長之

友則 貫之
躬恒 忠岑

海内の中書字にたりて多
くはやくんともやくんとも

二十卷
佐撰集
村上天皇御宇
天曆元年撰者

能宣 順
元輔 時文
望城

深きものも打きま
す中よりわたりぬれり

二十卷
指遺集

一條院御宇
長徳元年
公任也
松山院御自撰

あつと斗之清り
下子今切あふん在書

二十卷
後指遺集

白河院御宇
應徳三年撰者
通俊也

あつと斗之清り
下子今切あふん在書

十卷
金華集

白河院御宇
天治元年撰者
白河院御自撰

あつと斗之清り
下子今切あふん在書

十卷
詞花集

白河院御宇
仁平元年撰者
顯輔也

あつと斗之清り
下子今切あふん在書

二十卷
千載集

後白河院御宇
天治三年撰者
俊成也

あつと斗之清り
下子今切あふん在書

早稲田子之幼少 佐和郎

二十卷
新古今集

九九百七十八首
依名序 後醍醐天皇

土御門清房

多之羽俊宣

元久二年撰者
百治元年(西暦1176年)

通具 有家

定家 家隆

雅經

山崎山子三十一
少りしきもいまた少く撰者

二十卷

新勅撰集

九九百七十九首
依名序 七卷家

後醍醐院御宇

貞永元年撰者
百治元年(西暦1176年)

定家

中玉乃年七
少りしきもいまた少く撰者

二十卷

續後撰集

九九百七十九首
依名序

後深草院御宇

長祿元年撰者

為家卿

年乃らたきらぬ
少りしきもいまた少く撰者

子乃らたきらぬ
依名序

二十卷

續古今集

九九百七十九首
依名序 菅長風
後名序 藤内房

龜山院御宇

建永二年撰者
元禄二年(西暦1181年)

前内大臣基俊

為家 行家

光俊

名乃らたきらぬ
少りしきもいまた少く撰者

二十卷 續拾遺集 古宇多院宣
皇山院宣
弘安元年撰者
為氏制

おまの年の平心命のうら
なりの者とて思ふまじり為成

二十卷 新撰集 古三條院御宇
古宇多院宣
嘉元元年撰者
為世卿

仿はぬのふもの衣冬をけ
雪けのやよききたり為成

二十卷 玉葉集 花園院御宇
伏見院宣

正和元年撰者
為兼卿

ふふふふのふのふのふの
心よきふのふのふの

二十卷 續千載集 花園院御宇
古宇多院宣
元應元年撰者
為世卿

おの日のやまのふのふの
おのふのふのふのふの

二十卷 續後拾遺集 後醍醐院御宇
二年二年撰者
為定卿

と朝のやまのふのふのふの

年為... 為世...

三卷 風雅集

光明院御宇
貞和元年
長園御自撰

舊の... 古の... 為...

二千卷 新千載集

後光嚴院御宇
延文四年撰者

為... 為...

二千卷 新拾遺集

同御宇
貞治三年撰者
為明和

... 為...

二千卷 新後拾遺集

永徳三年撰者
為定和

... 為...

二千卷 新續古今集

後長園院御宇
永徳十年撰者
雅世卿

... 為...



山石門
面
善
業

